

悪いのは
マングースじゃない

外来種を持ち込まないで！

マングースは奄美大島では生態系を壊すやっかいものですが、インドなど元の生息地では生態系の大事な一員です。人間が持ち込んだことによって、奄美大島の生態系を攪乱する存在になってしまいました。こうした私たちの過ちを自覚し、同じような事が起きないようにすることが大切です。

外来種の被害予防3原則

入れない

悪影響を及ぼすおそれのある
外来種を自然分布域から
非分布域へ「入れない」

捨てない

飼養・栽培している外来種を
適切に管理し、
「捨てない」

ひろげない

すでに野外にいる外来種を
他地域に「ひろげない」

奄美大島の外来種

マングースがいなくなった後も、奄美大島にはノネコやノヤギ、クマネズミ、オオキンケイギク、オオフサモなど多くの外来種が定着しています。直接的、間接的に奄美大島の在来生態系や人間の生活に悪影響を及ぼしているこれらの外来種の早急な対策が必要です。



ノネコ



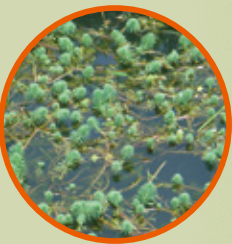
ノヤギ



クマネズミ



オオキンケイギク



オオフサモ

！ マングース（フイリマングース）を見つけたら教えてください！

マングースは外来生物法によって特定外来生物に指定されており、飼育や生きたままの運搬は法律で禁止されています。奄美大島では2024年にマングースの根絶が確認されましたが、沖縄県ではまだ多くのマングースが生息しており、奄美群島に再侵入するおそれもあります。もしマングースを見つけたら、奄美野生生物保護センターにご連絡ください。

TEL：0997-55-8620 E-MAIL：RO-AMAMI@env.go.jp



奄美野生生物保護センター

奄美大島の自然を守るためにできること

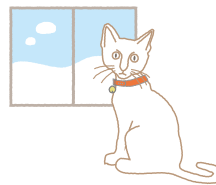
ペットを
捨てないで



ネコ条例について

奄美大島5市町村のネコ条例で決められていること

- 飼い猫にマイクロチップ・首輪をつけて飼い猫登録をしましょう。
- 室内飼育に努めましょう。
- 完全室内飼いを除き不妊去勢手術を必ずしましょう。
- 飼うのは4頭まで。※5頭以上飼う場合は許可が必要です。
- 飼い猫以外のネコにみだりにエサを与えてはいけません。



☆奄美マングースバスターズの活動にご協力をお願いします。



ブログ：
<https://amb.amamin.jp>



facebook：
<https://www.facebook.com/amami-mongoosebusters/>



YouTube：
https://www.youtube.com/channel/UCt9-OrQjH9_IwAlhFdu1ZVA

地球のいのち、つないでいこう

生物多様性



2024年9月
奄美大島からの
マングース
根絶達成

世界でたったひとつの 奄美を守る



奄美大島マングース防除事業



環境省
Ministry of the Environment



世界自然遺産「奄美大島、
徳之島、沖縄県北部及び西表島」
2021年、日本列島の南端部に位置する琉球列島の4つの島の一つとして、世界自然遺産に登録されました。多くの固有種が生息し、日本の中でも生物多様性が高い地域です。

2024年9月 奄美大島からのマンゲース 根絶を宣言！

環境省は、2024年9月3日に奄美大島から特定外来生物フイリマンゲース (*Urva auropunctata*、以下マンゲースと称する) が根絶したことを宣言しました。奄美大島にマンゲースが放たれてから45年、マンゲースの捕獲が始まってから31年、島全域からの根絶という、世界的な快挙が成し遂げられたのです。

根絶を宣言した記者会見会場では、環境省自然環境局植田局長の「ここに、奄美大島からのフイリマンゲースの根絶を宣言します」という言葉を受けて、集まった奄美マンゲースバスターズや研究者、行政関係者から、大きな拍手が沸き上がりました。長年にわたり、マンゲース防除事業に関わってきた人々の思いが、結実した瞬間でした。



よかった



これで子育てが安心してできるわ！



平和な奄美の森がもどってきたキュー



奄美の皆さんからの言葉

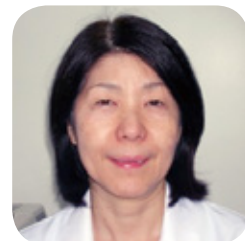


本来の奄美の森が戻ってきた!?

NPO 法人奄美野鳥の会
ながい ゆみこ
永井弓子さん

奄美野鳥の会では1994年から毎年、オオトラツグミの調査をしてきました。初めの頃は観察される数はわずかでしたが、徐々に増加してきて、2024年にはこれまでの最高値を記録しました。

私たちはマンゲース防除が進むにつれて回復していく奄美の森を見つめてきました。マンゲースが根絶した今「本来の奄美の森はこんなに豊かだったのか」と驚いています。根絶を成し遂げてくれたすべての方に感謝したいです。



奪った命を思い、
第2のマンゲースは作らない

奄美哺乳類研究会・獣医師
はんだ ゆみこ
半田ゆかりさん

根絶は奄美マンゲースバスターズの活躍のお陰です。獣医師として、根絶までに奪われたマンゲースの命に対して思うことはありますが、大切なのは第2のマンゲースを生まないこと。

ペットの適切な飼養など、島の皆さんと様々なことを考えていきたい。ノネコの問題をはじめ、これからも奄美の自然を守る活動に、関わっていききたいと思います。



湧き上がる歓声の声！
おめでとう！そして、
ありがとう！

自然写真家
つねだ まもる
常田 守さん

マンゲースが奄美の自然にとって脅威であると、最初に訴えたのは私でした。それから長い時間がかかりましたが、根絶という夢を、奄美マンゲースバスターズが叶えてくれました。感謝です！

マンゲースがいなくなった森では、アマミノクロウサギやケナガネズミなど、動物たちが驚くほど増えました。まだまだノネコやヤギなどの問題もありますが、世界自然遺産にふさわしい森をこれからも守っていきたいです。



最後の1頭を捕った興奮は
忘れられない

自然ガイド・奄美自然環境研究センター
にし まさひろ
西 真弘さん

2005年に奄美マンゲースバスターズに入りました。昆虫が好きな自分にとって、毎日山に入れる最高の仕事でした。最初は「根絶は無理では…」と思っていましたが、次第にマンゲースの減少を実感し、根絶を予感するようになりました。2018年に最後の1頭を捕ったのは私です。「これが最後の1頭かも」と興奮しましたが、本当にそうなのは！今は自然ガイドをしており、生きものが戻ってきた奄美の山にお客さんを案内できる喜びを感じています。

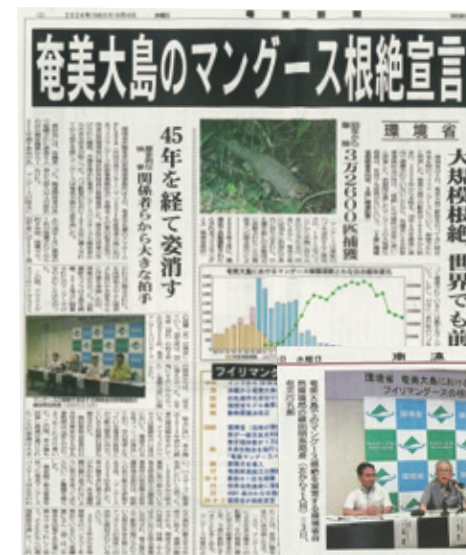


ここがすごい！ 奄美のマンゲース根絶

- ・マンゲースの根絶事例では世界最大面積
- ・10,000頭ほどに数が増え、
島の大半にひろがってからの根絶
- ・世界自然遺産に登録された
貴重な自然を救った

外来種対策は生物多様性の保全において重要な課題であり、世界中で対策が進められています。しかし、我が国では対策によって個体数が減少したり、分布が縮小するなどの成果が得られている事例はそれほど多くありません。そのような中、奄美大島のように大きな島から、マンゲースを根絶した事例は、世界的にも類がありません。しかも、奄美大島のマンゲース防除事業は島の大半にマンゲースが分布をひろげ、推定10,000頭とも言われる数まで増加した後で始まりました。

毒蛇であるハブも生息する奄美大島での根絶は、まさに世界的な快挙です。奄美大島のマンゲース根絶のニュースは世界中に発信され、外来種対策に取り組んでいる多くの人々に希望を与えました。



新聞など
メディアにも大きく
取り上げられました！

奄美新聞
2024年9月4日掲載



南海日日新聞
2024年9月4日掲載



奄美大島に連れてこられた マングースはどんな動物だった？

マングースは日本にはもともといなかった外来種です。しかし、^{どくじゃ}毒蛇のハブや農作物に被害を及ぼすネズミの^{くじょ}駆除を目的として、1910年に沖縄島に、1979年に奄美大島に放たれました。生態系や人の生命、農業などに対して被害を及ぼすことから、2005年に外来生物法に基づく特定外来生物に指定されました。

^{とくていがいらいせいぶつ}
特定外来生物とは
海外から日本に持ち込まれた生きもので、生態系や人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすものとして、外来生物法に基づいて指定されたもの。特定外来生物に指定されたものは、輸入、放出、飼養等、譲渡し等が原則として禁止されます。マングースのほかに、カダヤシやウシガエルなどが指定されています。

フイリマングース (*Urva auropunctata*) の生物学

Q どこにいるの？

中東から中国にかけて、南アジアの広い範囲が本来の生息地です。ハワイやカリブ海の島々にも、ネズミの駆除などを目的として放され、少なくとも76の島・地域で定着しています。日本では、奄美大島、沖縄島、鹿児島県本土の一部で生息が確認されています。

Q 大きさは？

頭からしっぽの先までの長さはオスで約60cm、メスで約50cm。
体重はオスで600～1000g、メスで400～600gです。

Q 何を食べる？

^{む せきつどうぶつ}昆虫などの無脊椎動物、^{せきつどうぶつ}トカゲやネズミなど小型の脊椎動物を主な餌としているほか、鳥や哺乳類も食べています。



マングースが来て何がおこった？

ハブやクマネズミが夜に活動するのに対し、マングースは昼間に活動するため、マングースがハブやクマネズミを食べることは多くありませんでした。一方で、昼間は巣穴にいるアマミノクロウサギの幼獣や地面の上に巣を作るアマミヤマシギは、ハブよりも簡単に食べることができるため、マングースの格好の

標的となり、急激に数を減らしていきました。このように、ハブやクマネズミを減らすことを目的として放されたマングースですが、期待していたような効果は得られなかったばかりか、もともと奄美大島にいた生きものたちに悪影響を与えるという結果になってしまいました。

アマミノクロウサギの巣穴に侵入するマングース



母親は幼獣の巣穴を何度も訪れる



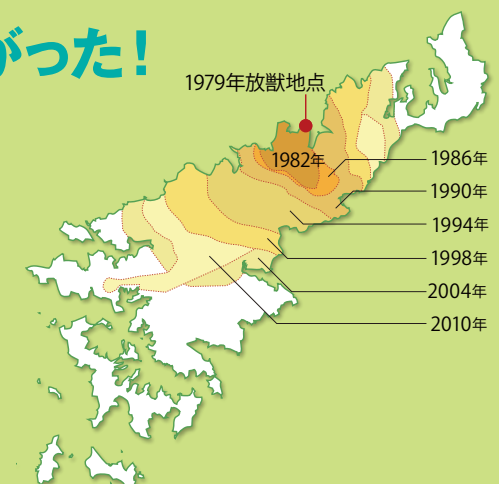
幼獣の巣穴に入ったマングース。
尾と後肢が見える



侵入した2分後に巣穴から飛び出したマングース
(写真提供/山田文雄)

マングースが増えて島にひろがった！

1979年に名瀬市(現奄美市名瀬)赤崎地区で放されたマングースは、1990年頃には名瀬市のほぼ全域に分布をひろげ、1998年には西は大和村や住用村(現奄美市住用町)、東は名瀬市と龍郷町の境界あたりまで分布をひろげました。2010年には、それまでマングースが確認されていなかった島南部の宇検村でも捕獲がありました。1979年に奄美大島に放されたマングースの数は30頭とされていますが、2000年にはおよそ10,000頭にまで増えていたと推定されています。

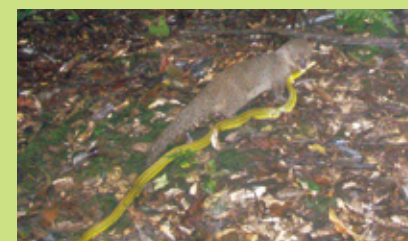


奄美の生きものたちが消えた

マングースの数が増え、分布をひろげるとともに、多くの生きものが食べられていることが明らかになってきました。マングースの胃内容物や糞を分析した結果、アマミノクロウサギやアマミトゲネズミなどが確認されたほか、アマミイシカワガエルなどの両生類、オキナワキノボリトカゲなどの爬虫類も食べられてい

ることがわかったのです。これらのマングースに食べられていた生きものは、世界中でも奄美大島とその周辺にしか生息していません。マングースが増えるとともに、奄美の生きものたちはどんどん姿を消していったのです。

マングースに食べられる生きものたち



マングースに捕まったリュウキュウアオヘビ

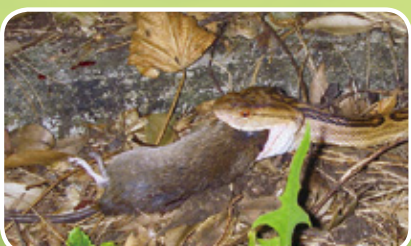


マングースの糞をほぐしてみると、アマミノクロウサギの体毛が出てきた
(写真提供/山田文雄)



オキナワキノボリトカゲ

奄美大島にはどうして連れてこられたの？



クマネズミを食べるハブ。マングースはハブを減らすことを期待して奄美大島に放されましたが、実際にはハブが大幅に減ることはありませんでした。

奄美大島や沖縄島には毒蛇のハブがいます。ハブがいることで奄美や沖縄の人たちは大変な苦勞をしてきました。また、外来種のクマネズミが増えすぎてサトウキビを食べてしまうことも大きな悩みでした。そこで、ハブとクマネズミを減らすことを目的に、インドから連れてこられたマングースが沖縄島に放されました。その後、沖縄島で増えていたマングースが奄美大島に連れてこられたのです。最初は1979年に名瀬市(現奄美市名瀬)の赤崎地区に30頭が放されたとされています。

マングース防除事業

マングースがいないうち美を取り戻す！

奄美大島にマングースが放たれたのは1979年、
1996年から島の皆さんによる捕獲が始まり、2005年からは
奄美マングースバスターズが精力的な捕獲を続けました。
そして2024年の根絶宣言。45年にわたる奄美大島とマングースの物語を振り返ります。

1979年～ マングースの駆除が始まるまで

マングースが放される以前、奄美大島の中央に位置する金作原は、たくさんのアマミノクロウサギ、アマミイシカワガエル、アマミヤマシギなどが姿を見せる、生きものが豊かな森でした。しかし、マングースが放された1979年以降マングース放獣地点から近かった金作原からは徐々に生きものの姿が消えていきました。マングースが放された当時、島にいる多くの人はハブが少なくなることを期待していましたが、奄美大島の自然にとって大変なことが起こると感じた人々も少なからずいました。そのひと



つが奄美哺乳類研究会です。1989年、当時はマングースの農業被害が目立っていましたが、農業被害だけでなく生態系へ与える悪影響を調べるため、奄美哺乳類研究会がマングースの調査を開始しました。その結果、マングースの胃からは奄美大島の様々な生きものが多く見つかり、島の人たちにマングースの恐ろしさを伝えるきっかけとなりました。また、この結果を受けて1993年から名瀬市（現奄美市名瀬）などで有害鳥獣捕獲が始まります。

2005年～ 奄美マングースバスターズ誕生！

奄美大島のマングース防除は、2000年から本格的に開始されました。当時は、猟友会の方や島の有志の方によってなされており、捕獲個体に対して報奨金を支払う形で進められてきました。こうした作業によって、多くのマングースが捕獲され、生息密度を下げることができました。一方で、林道から離れた山の中での捕獲作業は実施されず、このままではマングースの根絶は難しいと考えられていました。そこで、奄美大島のあらゆる場所でマングース

結成当時



を捕獲し、島全域からの根絶を達成するための捕獲作業の担い手として、2005年に「奄美マングースバスターズ」が結成されました。奄美マングースバスターズは、オオトラツグミなどの鳥類やカエル類の減少に、危機感を抱いていた島の方々の期待を背負い、マングース根絶に向けた活動をスタートさせました。

2018年～ 最後の1頭が捕獲され、根絶確認に向けた防除実施計画を策定

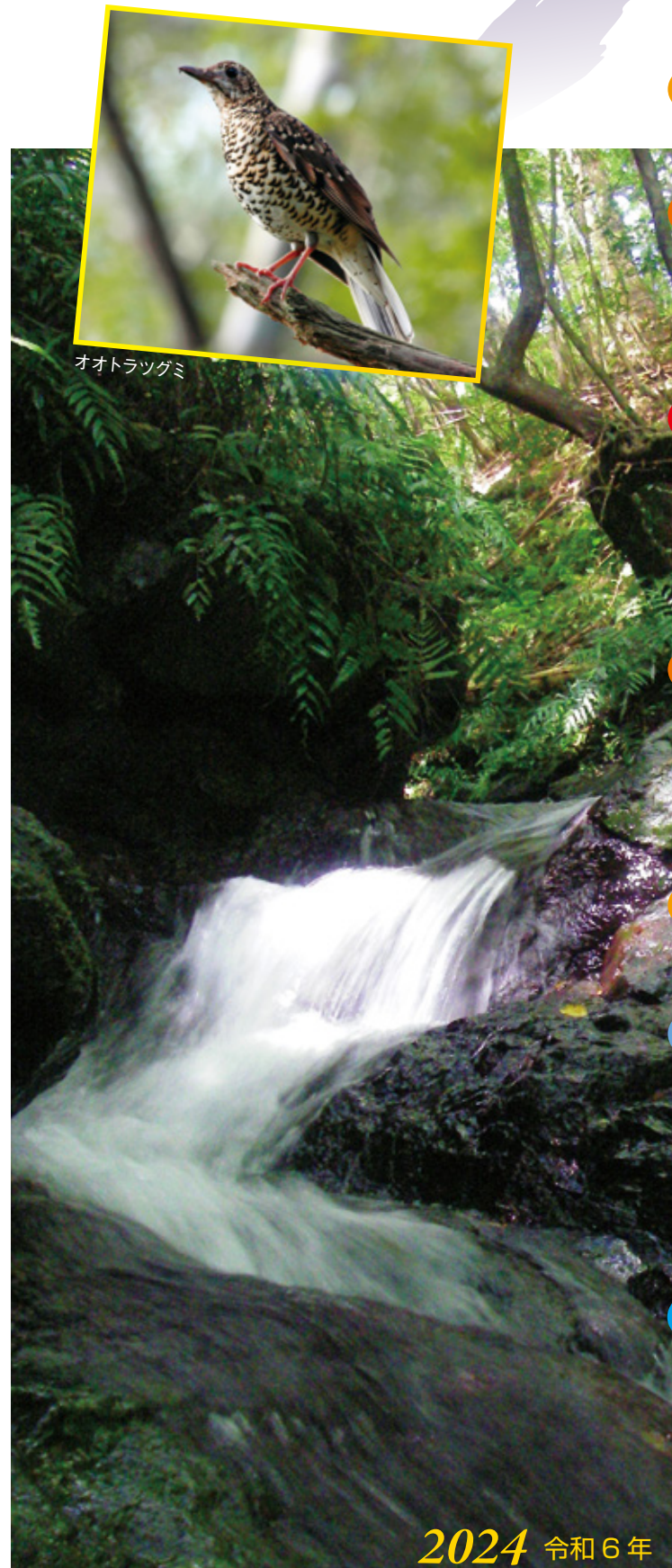
奄美マングースバスターズが設置したわなは島のほぼ全域に及びました。それを日々、点検し続ける地道な作業によりマングースの数は減っていき、ついに2018年4月に奄美市名瀬小湊で捕獲された1頭を最後に、マングースの生息情報は途絶えました。その日からはマングースが捕獲されず、センサーカメラにも映らない日々が続きました。しかし、マングースが「見つからないこと」と「いないこと」の間には大きな隔たりがあります。その隔たり

を埋め、マングースがこの島にいないことを科学的に判断するための方法を検討し、2021年に「根絶確認及び防除完了に向けた奄美大島におけるファイリマングース防除実施計画」を策定しました。計画に従って、わな、探索犬、センサーカメラによるモニタリングを継続し、そのデータに基づいてマングースの根絶確率を算出することで、根絶の成否を判断することとしました。

2024年 科学的な判断に基づいて根絶を宣言

2018年に最後のマングースが捕獲されてから6年がたち、その期間に得られたわな、探索犬、センサーカメラによる調査データを用いて、奄美大島のマングースの根絶確率が算出されました。その結果、根絶確率は100%

に極めて近い数値となり、科学者たちによって根絶したと判断することが妥当と評価されました。そしてついに、2024年9月3日、マングースの根絶が宣言されたのです。



オオトラツグミ

1979 昭和54年

沖縄島から持ち込まれたマングースが奄美大島に放される

1989 平成元年

生態系への影響調査開始(奄美哺乳類研究会)

推定頭数

1,000

1993 平成5年

有害鳥獣捕獲開始(市町村)

6,000

1996 平成8年

生息調査・駆除モデル事業開始(環境庁・鹿児島県)

有害鳥獣捕獲補助開始(鹿児島県)

10,000

2000 平成12年

本格的な防除事業開始(環境庁)

2003 平成15年

有害鳥獣捕獲事業終了(鹿児島県・市町村)

5,000

2005 平成17年

外来生物法施行
奄美大島マングース防除事業開始(環境省)
奄美マングースバスターズ結成
防除実施計画策定

1,000

2008 平成20年

探索犬導入

150

2013 平成25年

第2期防除実施計画策定

2017 平成29年

奄美群島国立公園指定
第2期防除実施計画見直し

10

2018 平成30年

年間マングース捕獲数1頭のみ

2021 令和3年

根絶確認に向けた防除実施計画策定
世界自然遺産登録

2024 令和6年

0

奄美大島からのマングース根絶を宣言

マングース 根絶の立役者

奄美の自然を守るプロ集団 マングースバスターズ

奄美マングースバスターズは、奄美大島からマングースを根絶し、奄美の生きものたちをよみがえらせることを目的として、2005年に結成されました。マングースを捕まえるための高い技術、山の中を歩き通す体力、奄美の自然に対する理解、そして奄美の自然をよみがえらせる熱意を兼ね備えています。時に豪雨にうたれ、ハブと遭遇しつつも、日々奄美の森の中で作業するマングースバスターズは、奄美の自然を守るプロ集団です。



(2018年)

マングースを捕りつくした、 高い捕獲技術

わなによる捕獲作業

2000年にマングース防除事業を始めた当時は、島の皆さんの協力を得て「カゴわな」による捕獲を進めました。その後、奄美マングースバスターズが本格的に活動を始めると、より広い範囲で綿密な捕獲をするようになり、新たなわなとして捕殺式の「筒わな」が導入されました。更に、アマミトゲネズミの混獲を回避する為に、「延長筒わな」が開発され、混獲のおそれがある地域で導入されました。こうしたわなを使い分けながら、マングースを漏らさず捕らえるよう、約3万個のわなが奄美大島全体にまるで網の目のように配置されました。



カゴわな



筒わな

マングースの根絶を 確かめた、高感度センサー

マングース探索犬

奄美のマングース防除事業では、生息数が少なくなってきたマングースを見つけ出すために、マングースを探し出す犬、探索犬が大きな役目を果たしました。探索犬はすぐれた嗅覚と運動能力、そして人の指示を理解しそれに従う能力を持った特別な犬です。探索犬は奄美マングースバスターズのハンドラー（訓練士）によって育成され、探索能力が一定の水準に達し、認定試験に合格したら、実戦投入されます。探索犬はハンドラーと共に奄美の森に入り、マングースの臭気や糞を捜します。時にはマングースの潜んでいる穴を突き止めて、ハンドラーが捕獲をする



合計13頭のテリア系、ジャーマンシェパード、ポインターからなる優秀な探索犬たちと、それを育てる8名のハンドラー
(2019年)

戻ってきた動物たちが、 マングースの不在を 教えてくれた

在来動物のモニタリング調査

奄美マングースバスターズは、捕獲によってマングースを減らしていくだけでなく、奄美の生きものたちがどのように回復してくるのかを確かめる、モニタリング調査もしました。島全域に設置している自動撮影カメラでは、アマミノクロウサギやアマミトゲネズミ、アマミヤマシギなどが、マングースの減少に伴って生息域を回復している様子がとらえられています。マングースがいた頃にはけもの気配がなかった森でも、今はアマミノクロウサギの糞で足の踏み場もないほどになっている事もあります。そうした光景を見ることが、奄美マングースバスターズの誇りです。



自動撮影カメラによって撮影された
ケナガネズミ(上)とアマミノクロウサギ(下)

最後の集団を消滅させた、 根絶への切り札

化学的防除

マングースが残り少なくなってきた2016年、困ったことがおこりました。奄美大島のとある場所で、道路脇に設置された落石防止ネットの周辺で、マングースの集団が残っていることが分かったのです。ネットの下ではわなの設置が難しく、探索犬も容易には入れません。そこで、新たな防除手法として、化学的防除が検討されました。化学的防除とは、マングースに対する毒性を有する化学物質を用いて防除を実施するもので、今回は事前に実施された研究の結果に基づき、ネズミを防除する殺鼠剤の主成分としても使用されているダイファシノンという薬剤を用いました。2017年の4月と2018年の3月に、ダイファシノンを含んだソーセージ状のベイトを、マングース以外の動物が食べないように工夫してネットの下に配置した結果、それ以降その周辺のカメラでマングースは1枚も撮影されなくなりました。マングースに対する化学的防除は国内では初めての事例であり、マングース根絶に向けて前進した大きな成果となりました。



化学的防除に用いたソーセージベイト



ベイトを食べているマングース

世界初！ マングース根絶 はこうして成し遂げられた

これまでに、マングースの根絶に成功した例は、1kmほどの小さな島だけです。奄美大島のように大きな島で根絶が達成されたことは世界的な快挙です。

本来マングースは南アジアに生息する動物でしたが、現在ではカリブ海の島々やハワイなど、世界の多くの地域に外来種

として定着しています。そうした地域でも、マングースがもともといた生きものを食べてしまったり、農業に被害を与えるなど問題になっています。奄美大島でマングースの根絶に成功したというニュースは、世界中の人たちにとっても大きな希望となりました。

地道なわなでの捕獲により、マングースの分布を分断し、消失させた

分布の変遷 ●マングース捕獲地点



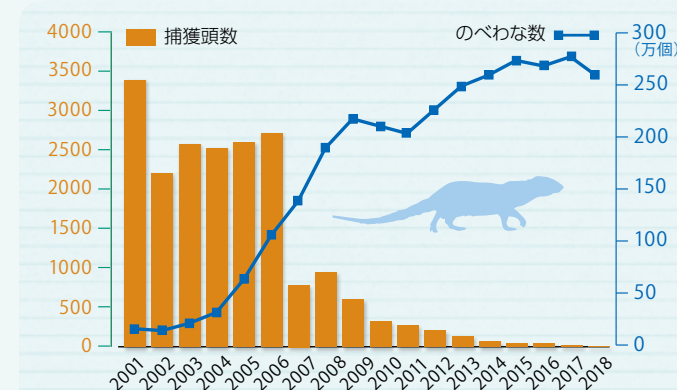
マングースの捕獲地点の経年変化を見ると、2006 年度には島の中央部にたくさんいたマングースが、2012 年度には徐々に数を減らし、分布域が分断されてきたことがよくわかります。そして 2018 年度には、マングースの捕獲が見られた地点はわずか 1 地点となり、この時を最後にマングースの生息情報は消えました。ここに至るまで、高密度に設置されたわなでの捕獲作業を継続し、かつ探索犬による残存個体の捕獲があったことで、マングースはついに奄美大島から姿を消しました。



継続的な捕獲により、マングースは着実に減ってきた

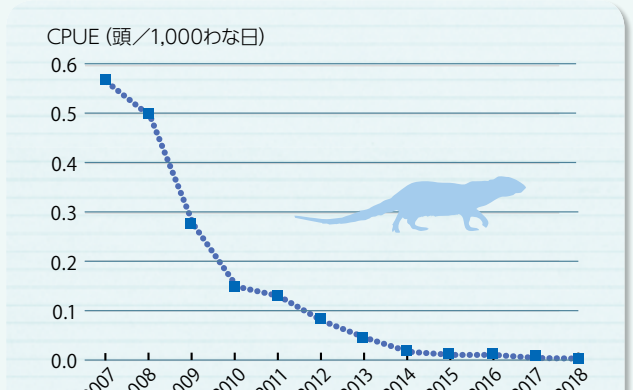
奄美大島では、これまでに 32,000 頭以上のマングースが捕獲されてきました。奄美マングースバスターズが活動を開始した 2005 年度から、わな(わな)の数は大幅に増えたにもかかわらず、マングースの捕獲数は着実に減少しました。マングースの生息密度(面積あたりに何頭生息するか)の変化を知るためには、捕獲率(CPUE)という数値を使います。CPUE は「のべ 1,000 個のわなで何頭のマングースを捕ったか」という数値です。野球に例えれば、マングースの捕獲数は「ヒットの数」、のべわな数は「打席数」、CPUE は「打率」にあたります。奄美マングースバスターズの捕獲によるマングースの減少が、CPUE の低下にも現れています。

捕獲数



のべわな数(折れ線グラフ)とは、わなを設置したのべ日数で、例えば 100 個のわなを 10 日間設置すると 1,000 わな日になります。奄美マングースバスターズの活動開始以来ののべわな数は急増し、2008 年度から 2020 年度にかけては 200 万わな日を超える捕獲作業を続けました。捕獲数(棒グラフ)は捕獲開始以降減少傾向にあり、2007 年度には 1000 頭を下回り、2019 年度にはついに 0 頭になりました。

CPUE の変化



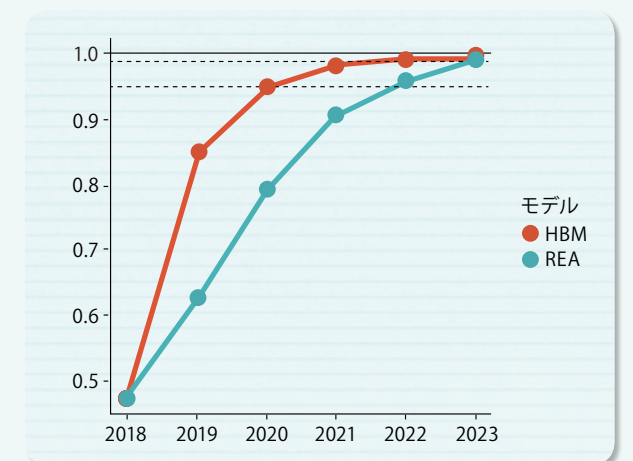
CPUE は、1,000 わな日あたりのマングース捕獲数であり、マングースの生息密度を反映する指標です。CPUE は急激に低下しており、マングースが少なくなっていることがわかります。

科学的な評価により、マングースの根絶を確認した

マングースのような中型哺乳類の根絶を、奄美大島のように大きな島で確認した事例は、世界的にもほとんどありません。もし、まだマングースが残っているのに、誤って根絶したと判断すると、奄美大島の生態系が再び脅威にさらされるばかりでなく、これまでに費やされた多額の事業費が無駄になってしまいます。そのため、根絶の判断には万全を期して、慎重に進めてきました。

判断の決め手になったのは、マングースの捕獲が見られなくなってからも続けてきたわなによる捕獲やセンサーカメラ、探索犬によるモニタリングの結果を活用し、計算された根絶確率です。計算の結果、2023 年度末には根絶確率が 99%に達し、根絶したと判断することが妥当であることが、科学者によって評価され、環境省は根絶を判断しました。

根絶確率の経年変化



グラフはマングースの根絶確率の推移です。根絶確率の算出は、地域毎の根絶確率を計算する HBM (Harvest Based Model) と個体ベースシミュレーションによって計算する REA (Rapid Eradication Assessment) という、2 つの計算モデルでおこなわれました。2023 年度末には HBM で 99.7%、REA で 98.9% という値に達しました。(令和 6 年度 奄美大島におけるフィリマングース防除事業検討委員会資料より)

いのちが再び輝きだした。

奄美大島は亜熱帯に位置し、1年を通して暖かく、たくさんの雨が降ります。スダジイを主とする国内最大規模の亜熱帯照葉樹林がひろがる、豊かな自然が残された島です。また、大陸や他の島と何百万年もの長い時間生きものの交流がなかったため、奄美大島独自の生物多様性が育まれてきました。このような自然条件と島の形成過程を反映して、奄美大島には世界的にも珍しい生きものが数多く生息しています。例えばアマミノ

クロウサギ。ウサギの仲間でもっとも原始的な姿を残しており、奄美大島がはるか昔に大陸とつながっていた頃から生息していたとされています。

このような生物多様性の豊かさから、奄美大島は徳之島や沖縄島北部、西表島と共に、2021年に世界自然遺産に登録されました。

この貴重な自然を、私たちは将来にわたって守っていかねばなりません。

奄美固有種の哺乳類が分布を回復している

マングースが減少していく中で、マングースに脅かされていた在来動物たちは徐々にその分布をひろげてきました。マングースを根絶したことで、これからさらに回復が進むことが期待されます。

アマミノクロウサギ

学名 *Pentalagus furnessi*

奄美大島と徳之島のみに生息し、ウサギの仲間でもっとも原始的な姿を残しています。昼間は斜面上に掘った巣穴で過ごし、夜になると巣を出て植物の芽やシイの実などを食べます。



アマミノクロウサギ

2014年 → 2023年



ケナガネズミ

学名 *Diplothrix legata*

奄美大島、徳之島、沖縄島北部に生息しています。日本に生息する在来ネズミのなかでもっとも大型で、主に樹上で生活し木の実などを食べます。その名のとおり、背中に6cmにも及ぶ長い毛が生えています。



ケナガネズミ

2018年 → 2023年



アマミトゲネズミ

学名 *Tokudaia osimensis*

奄美大島のみに生息し、徳之島に生息する近縁種トクノシマトゲネズミとともに、オスがY染色体をもたない哺乳類としても有名です。名前のおとりトゲのような毛で覆われており、ハブの攻撃に対しジャンプで攻撃をかわします。シイや木の実を主に食べます。



アマミトゲネズミ

2018年 → 2023年



マングースが消えた奄美の森

奄美大島の生きものにとって、マングースは大きな脅威でした。マングースが放たれ、奄美の森にひろがっていくと、そこからは在来のネズミやカエルが姿を消していきました。もし、マングースが防除されることなく、今も放置されたままだったら、いくつかの種が絶滅してしまっていたかもしれません。奄美大島のマングース防除事業はそうした生きものを危機から救いました。そしてマングースが根絶された今では、多くの生きものが数を増やし、分布をひろげ、かつての輝きを取り戻しつつあります。

奄美大島のマングース防除事業はそうした生きものを危機から救いました。そしてマングースが根絶された今では、多くの生きものが数を増やし、分布をひろげ、かつての輝きを取り戻しつつあります。

奄美固有種の鳥類の数が増えている



センサーカメラによるモニタリング結果

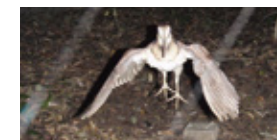
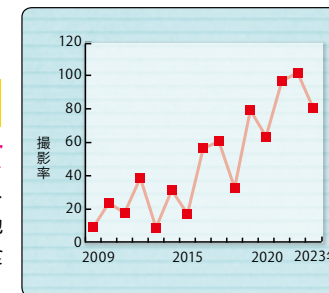
この図は、奄美マングース防除事業で実施されたセンサーカメラによる調査での、オオトラツグミとアマミヤマシギの撮影率(1,000日カメラを設置した場合に撮影される枚数)の変化を示したものです。マングースの減少に伴って、奄美固有種のこれらの鳥が回復していることが示されています。



オオトラツグミ

学名 *Zoothera dauma major*

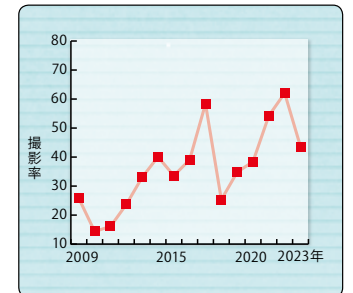
奄美大島の天然照葉樹林でのみ繁殖する大型のツグミ。主に地上で昆虫・ミミズ・果物などを食べます。



アマミヤマシギ

学名 *Scolopax mira*

琉球列島のみに生息し、奄美大島や徳之島などで繁殖するシギ。森林内に生息し、長いくちばしを使い地中のミミズなどを食べます。



奄美固有種のカエルたちの数が増えている



目視調査によるモニタリング結果

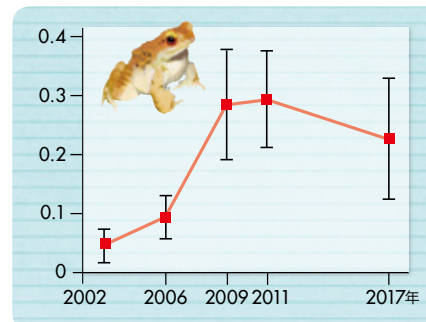
このグラフは、全長 41.1km の奄美中央林道を夜間に車でゆっくり走り、見つかった生きものを数えるという、根気強い調査の結果です。調査は各年に4回実施されていますが、縦軸には調査1回あたりの発見数、横軸には調査をした年が示されています。



オットンガエル

学名 *Babina subaspera*

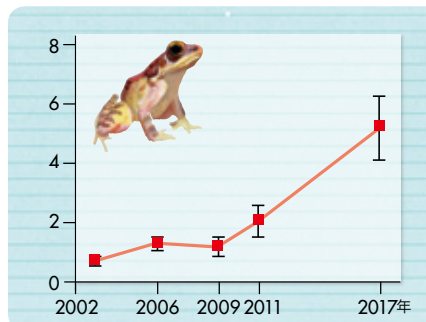
奄美大島と加計呂麻島にのみ生息する大型のカエル。



アマミハナサキガエル

学名 *Odorrana amamiensis*

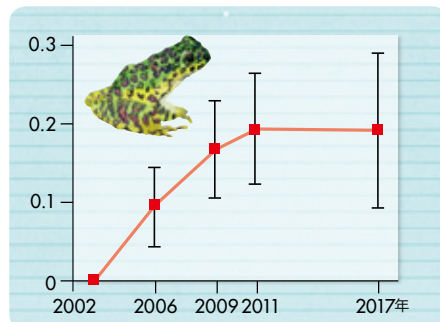
奄美大島と徳之島にのみ生息する、跳躍力に優れたカエル。



アマミシカワガエル

学名 *Odorrana splendida*

奄美大島にのみ生息する、金褐色の斑紋がある日本一美しいカエル。



Watari et al. (2013) を改変

これからも
奄美を
守り続ける
ために

マングースだけじゃない 奄美を、守り続ける。

奄美大島ではマングースが根絶されましたが、沖縄島には依然として多くのマングースが生息しています。今後、海運でのつながりがある沖縄島から、マングースが再侵入する可能性はゼロではありません。また、2023年に徳之島で特定外来生物のシロアゴガエルの侵入が確認されたように、世界自然遺産である奄美大島の生物多様性を保全するためには、新たな外来生物の侵入に対する監視を怠ることはできません。

奄美大島におけるマングース侵入・定着防止計画

環境省は、マングース根絶後の奄美大島への再侵入および定着を防止することを目的として、「奄美大島におけるマングース侵入・定着防止計画」を策定しました。この計画では、島へのマングースの侵入をいち早く検知し、万一定着が確認された場合には直ちに駆除することができるよう、段階に応じた対応方針が示されています。

フェーズ 1 通常の侵入監視体制の維持

- ① 島民の皆さんへの注意喚起と目撃情報の収集
- ② 自動撮影カメラによるモニタリング
- ③ 探索犬によるモニタリング

フェーズ 2 マングース生息情報が得られた場合

- ① 情報の精査
- ② 駆除を実施するため体制の準備

フェーズ 3 明らかにマングースであると確認された場合

- ① 根絶経験をモデルケースとした初期防除



マングースは二度と奄美大島に入れない！そして生態系の新たな脅威となる外来生物の侵入を全力で阻止する！そのために、奄美マングース防除事業で培った探索犬やセンサーカメラの技術を活かして、継続的な監視が必要です。

報道発表：
奄美大島におけるマングース
侵入・定着防止計画の策定



上記の対応を実現するために、通常時から以下の体制を確保し、マングースの侵入監視を継続的に実施します。

- ☑ マングース探索犬の維持と他の外来種（シロアゴガエル等）の探知への適用の検討をします。
- ☑ 関連する多様な行政機関との連携を図り、一体となってマングースの侵入監視を進めます。



奄美大島からは、マングースという在来生態系への大きな脅威は去りましたが、まだそれを脅かす存在が残されています。ノネコはマングース以上に優秀なハンターであり、奄美大島の森林からは排除する必要があります。

生態系保全のためのノネコ管理計画

現在ノネコは奄美大島の山奥にも生息が確認されています。マングース防除事業などで設置されたセンサーカメラでの調査により、奄美の森の中でノネコはアマミノクロウサギやアマミトゲネズミといった在来の動物を食べていることがわかりました。マングースがいなくなった奄美の森で、在来の動物たちにとって次に大きな脅威はノネコです。

「奄美大島における生態系保全のためのノネコ管理計画」は、環境省、鹿児島県、島内5市町村により策定され、奄美大島の生態系に対してノネコが及ぼす影響を取り除き、さらにノネコの発生源対策として適切な飼養を推進することを目的としています。



ノネコによって捕食されたアマミノクロウサギ（左）とケナガネズミ（右）

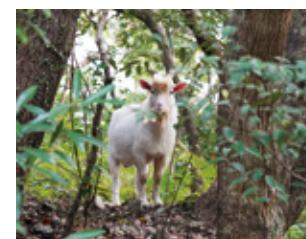
計画に沿って、奄美大島では以下のような取り組みが進められています。

- ☑ 森林内でのノネコの捕獲
- ☑ センサーカメラなどによるノネコのモニタリング
- ☑ ノネコの発生源対策としての集落での適正飼養の推進

ノネコ発生源対策の具体的な取り組み

- ☑ 飼い猫の適正飼養に関する条例の制定
(飼い猫へのマイクロチップ挿入と繁殖制限の義務化)
- ☑ 飼い猫の不妊去勢助成事業の実施とノネコのTNR
(捕獲して不妊化した後に放獣)
- ☑ 適正な飼養に関する普及啓発活動

奄美の自然を守るため、まだまだ外来種対策が必要です



ノヤギ

学名 *Capra bircus*

家畜が放棄され海岸沿いで野生化、近年は集落から離れた内陸部にも拡大しています。



アメリカザリガニ

学名 *Procambarus clarkii*

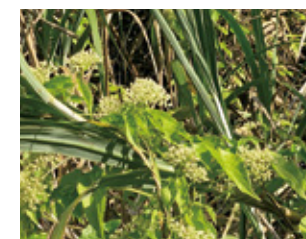
奄美大島では奄美市名瀬小湊地区で生息が確認され、対策が進められています。



シロアゴガエル

学名 *Polypedates leucomystax*

2023年に徳之島で確認され、対策を実施中。奄美大島には未侵入ですが、警戒が必要です。



ツルヒヨドリ

学名 *Mikania micrantha*

奄美大島では道路の法面などに定着しています。